

乳幼児期に抗原を摂取することでピーナツアレルギー発症リスクが低下

西洋諸国におけるピーナツアレルギーの発症頻度は過去 10 年間で 2 倍になっており、アフリカやアジアでもピーナツは主要なアレルギー性食品となっている。現在のところ治癒的治療法はないが、本研究ではピーナツアレルギーのリスクが高い乳幼児に対し、どの方策が有効であるかを検討した。

英国において、重度の湿疹か卵アレルギーの既往があることからピーナツアレルギーが高リスクであるとされる乳幼児（生後 4 ヶ月～11 ヶ月）640 例を登録し、ピーナツ摂取群とピーナツ除去群にランダムに割り付け、5 歳時点でのアレルギー発症を比較した。ピーナツ摂取群には週 3 回以上、ピーナツたんぱく質を含む食品を摂取させ、ピーナツ除去群には 5 歳になるまでピーナツを含む食品を摂取させなかった。ランダム化前の皮膚プリックテストで陰性であった 530 例では、5 歳児のピーナツアレルギー発症率は、ピーナツ除去群の 13.7% に対し、ピーナツ摂取群では 1.9% であった ($P < 0.001$)。皮膚プリックテスト陽性の 98 例でも結果は同様に、ピーナツ除去群とピーナツ摂取群のアレルギー発症率はそれぞれ 35.3%、10.6% ($P = 0.004$) であった。重篤な有害事象の発生頻度は両群で差はなかった。

今回の結果から、ピーナツアレルギー発症のリスクが高い乳幼児において、早期からピーナツたんぱく質を摂取することでピーナツアレルギー発症のリスクを有意に低下させることが示された。

出典：New England Journal of Medicine. 2015; 372(9): 803-813